1245

小枝2号墳

1990.3

吉井町教育委員会

小枝 2 号墳出土陶棺装飾妻部

序

吉井町は赤磐郡の北端に位置し、吉井川が東部を流れ、又、美作方面からの源流である吉野川の合流地点で、戦国・旧藩時代を通じて常に備前美作両国の国境いの要衝として交通・経済文化が栄えてきました。

新岡山空港・瀬戸大橋の完成という時代の推移は社会環境を変化させましたが、今後美しい自然と活力ある郷土の振興計画を策定して「自然・産業・歴史の特性を生かしたまちづくり」即ち城山公園・特産物開発としてのワインづくりに着目することになりました。

国道三七四号線と主要地方道赤穂、建部線の交叉点である吉井町福田（通称土手）の山裾の私道拡幅工事中土器が発見され、興味をもって発掘してみると陶棺が出土するにいたりました。文化財への見直しがなされている現在、慎重な発掘と調査を実施、本町に於ては初の復元措置により郷土資料館に保存することといたしました。

おわりに、本調査ならびに整理にご支援を賜わりました岡山県教育委員会文化課・岡山県古代吉備文化財センターをはじめ献身的なご努力をいただいた各位に衷心より厚くお礼を申し上げます。

1990年3月

吉井町教育委員会
教育長　金谷　弘衛

目　　次

調査に至る経緯……1
位置と環境……1
発掘調査……3
追跡調査……8
陶棺
まとめ……13

例　　言

1．本書は、岡山県赤磐郡吉井町福田133番に所在した陶棺の発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は、吉井町教育委員会が主体となり、岡山県古代吉備文化財センターの河本清が現地調査を担当した。調査にあたっては吉井町教育委員会、吉井町役場、地権者、地元作業関係者等から多大の協力を受けた。
3．調査期間は、1987年11月５日から同11月18日まで実施した。
4．発掘調査ならびに陶棺の実測と撮影にあたっては文化財センターの多くの学友・諸兄の援助を受けた。
5．陶棺の復元にあたっては久米町教育委員会ならびに久米町池田登、上原留雄両氏の協力をえた。
6．こ本書に使用したレベルは海技高である。方位は磁北である。
7．本書の編集は河本が行った。
8．出土陶棺は吉井町教育委員会が保管し、実測図、写真等は岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

1．調査に至る経緯

小枝２号墳と呼称する当調査地は、1988年10月調査地に隣接する難波辰男氏が墓地に小形のユンボを入れようとして斜面に入った所、土師質陶棺を発見したことによる。このため緊急に調査する必要が生じ、岡山県教育委員会文化課、岡山県古代吉備文化財センター、吉井町教育委員会の三者協議の結果、吉井町教育委員会が発掘調査主体となり、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査指導として、現地において対応することとなった。

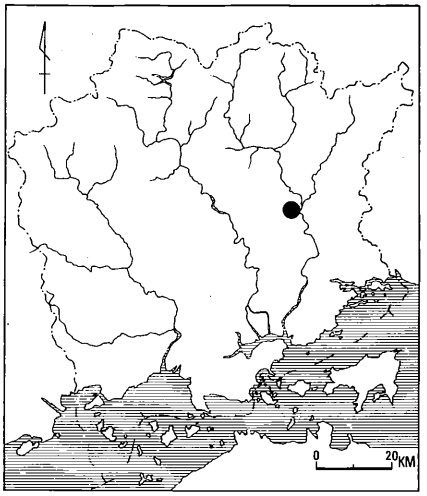
ところで、当該古墳は1979年刊行の『岡山県遺跡地図』にはその所在は記載されていない。しかし、『月の輪古墳』の報文中には、当調査地の西に隣接した斜面部に小枝古墳として明示されている古墳がある。（注１）また、『赤磐郡誌』には、吉井町小枝1053番地に火の釜古墳の記載がみえる。（注２）試みにこの番地名を調べると調査地の西側の山裾に該当する字名が確認される。しかし、この番地の地点には古墳らしい遺構は現状では確認できない。このため、これ以上の追跡調査はできないので、総合調査を行った『月の輪古墳』の報文を生かして、報告書記載の小枝古墳を１号墳とし、当該古墳を小枝２号墳と呼称することとした。

2．位置と環境

小枝２号墳の所在する吉井町は、岡山県東部の吉井川中流域に位置し、吉井川右岸の小平野を中心に広けた町で、地勢の大部分は標高200 ～300ｍの吉備準平原からなる地域である。

この山間地域も弥生時代中期後半ないし、後期に至ると水稲生産の一定の技術進歩のもとに最初の開拓者の足跡をみることができる。さらに後期に至ると山間部から吉井川右岸の沖積平野にも開拓が進めれたことが指摘されている。（注３）今回の調査においても弥生時代後期前半の壺と甕が出土しているので、このことを一層裏付けるものであろう。前半期の古墳は、吉井川と吉野川の合流する隣接の飯岡・王子地域に集中して築造されるのに対して、この地域は注目すべき前半期古墳は１基もない。

古墳総数をみても全町で20数基を数えるにすぎない。それも大部分は横穴式石室墳を中心とした後期古墳である。小枝２号墳もそれらの一つに加わるものである。古代寺院址としては当調査地の北約2.6kmの近距離に白鳳時代創建の黒本廃寺が確認されている。



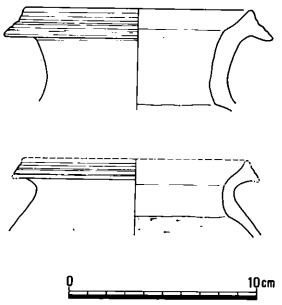
１．遺跡の位置

律令体制の成立とともに713年（和銅６）に美作国が設置されると、この地域は備前国の北東部にあたり

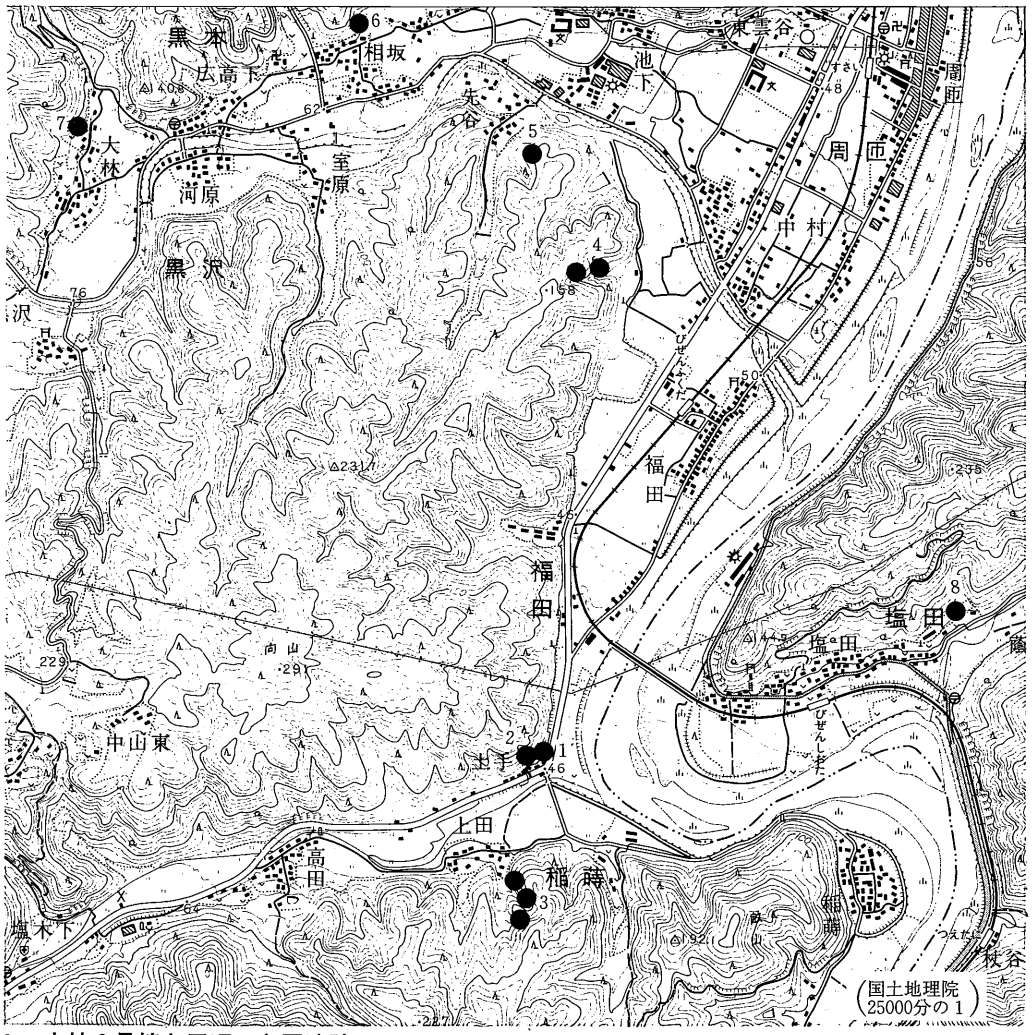
吉井川をはさんで美作国と接する国境の地域となる。

また、平城京出土の木簡にみえる「備前国赤坂郡周匝郷調鍬一口、天平十七年十月廿日」の周匝郷はこの地域に比定されるところである。

注1．近藤義郎「歴史的環境」『月の輪古墳』　1960年
注2．『改修赤磐郡誌全』　1973年
注3．注1に同じ



2．弥生土器



3．小枝2号墳と周辺の主要遺跡

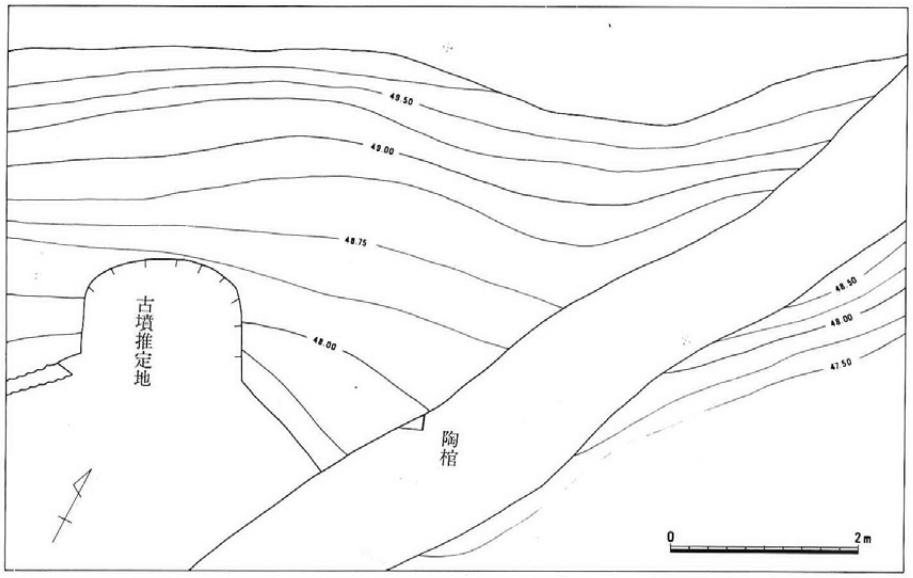
1．小枝2号墳　2．小枝古墳　3．上田古墳群　4．寺山東谷古墳群　5．先谷積石塚　6．火の釜古墳
7．七人塚　8．塩田小学校裏山古墳

3．発掘調査

発見時の陶棺は、南面する山裾の斜面に、棺身部の一方の小口と、棺蓋を棺身部の上に乗せた状態で露見し、しかもその近くに横穴式石室の石材かとみられる、やや大きめの石が2個認められたので、この陶棺の場所が墳丘を削平された古墳である、ということを疑うことなく発掘調査を開始した。

調査は陶棺を中心に十字状に畦畔を残し、四区画に調査区を設定した各区から掘り下げを行うこととした。しかし、陶棺の埋まっている中心部には、榎の切株痕が棺を覆うように残っていたため、四方に広がっている根痕跡を除去するのに、慎重に作業を行ったため、相当な時間を要した。ところが榎株を取り除き、陶棺部の調査を進めて間もなく、この陶

4．調査前の陶棺出土地（南から）



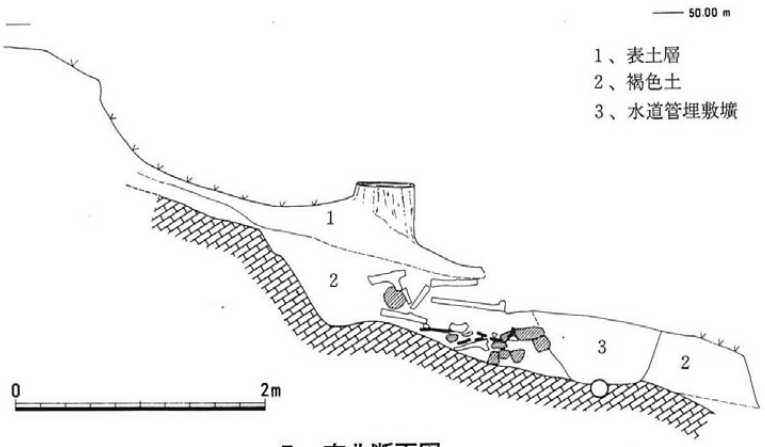
5．地形図

6．発掘調査風景（南から）

棺は原位置を保つものでなく、他の場所からこの地点に移築され改葬したものであることが判明した。即ち、陶棺露出部の反対側の斜面は、地山である岩盤が急激に高さを増してゆく自然地形そのものであり、前面は幅２ｍばかりの石組による祭段状の造りを行っていることが確認されたのである。

さらに調査を進めると陶棺の下部から、近代の瓦やガラス片も発見されるに及び、まぎれもなく本陶棺は移築され改葬されたものであることが判明した。そしておそらく改葬時に榎を記念樹として植樹したものと予測した。

このため、調査は古墳の原位置を確認する追跡調査に主力を移すこととした。そこで注意されたのが西側にあるごみ捨て場となっていた窪地である。



7．南北断面図

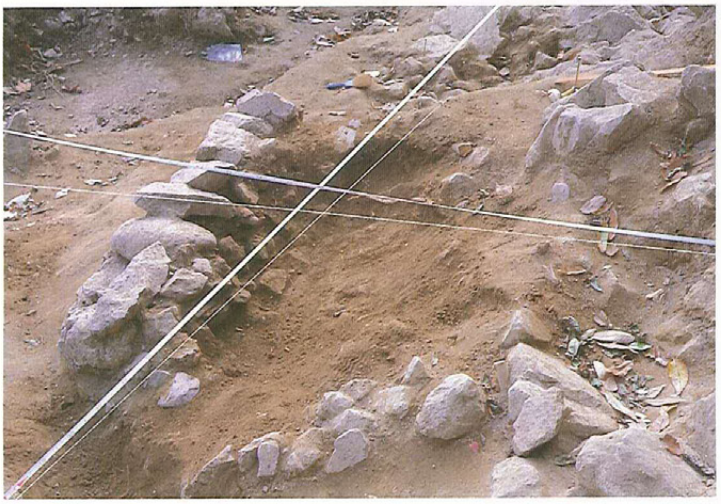
8．陶棺検出状態
（北から）

9．陶棺検出状態
（南東から）

10．調査区全景（南から）
祭段状に石を組んだ小区画に陶棺を改葬している。（図右）、小石室の古墳を推定した窪地（図左）

11. 陶棺改葬状況
（南から）

12. 陶棺掘り下げ作業
（東から）



13. 陶棺を取り上げた後の状況
（東から）

14. 古墳の築造を推定した西側の窪地（南から）

4．追跡調査

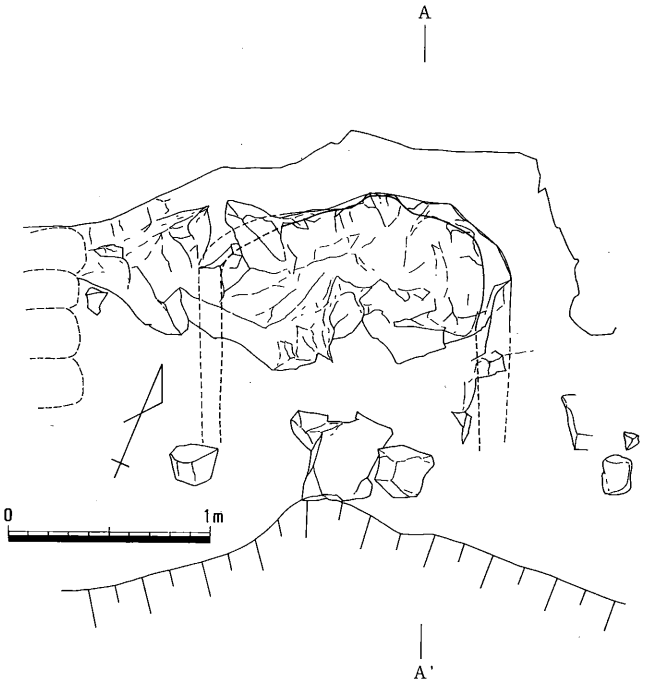
陶棺出土地の西約２ｍの所にある窪地は、岩盤からなる斜面を大きく掘削した東西160㎝、南北120㎝、深さ80㎝ばかりの凹地で、ごみ捨て場となっていたものである。しかし、もともとごみ捨て場を目的に掘削したものとすれば、硬い岩盤を大きく開削しているので、相当の労力を要することは必然で、単純には納得いかない所であった。そこで、.陶棺との関係からみて古墳の残骸ではないかと予想し、新たに地権者の了解を求め、調査期間の制約もあったが、窪地部分に限って調査することとした。

調査は、捨てられたゴミ等を含んだ埋土を排土することから始められたが、埋土を排土するとまもなく、岩盤の硬い地山面が検出された。そして、岩盤面は若干の凹凸をもちながらもほぼ平坦な面として東西約240ｍ、南北約120～60ｍの範囲に「コ」字状に検出された。しかし、西側の端部は石垣によって画されているため調査は石垣までとした。ただ西端部近くの崖面を詳細に観察すると、東端から約230ｍ付近から西にかけては、崖面の掘開の掘り切り痕跡が、新しいものと判断されるので、おそらく西端部は石垣を組む階段で、新たに掘開されたものと推察された。また、南側については、岩盤露見端面からは徐々に傾斜を減じてゆき、崖下端から南約190㎝前後で、大きく掘削されているのでそれ以上の調査は断念した。ところで、岩盤を深い所で１ｍ程切って、平坦地とした露岩面は、崖の側面に沿って浅い溝をコ状に掘り込んでいる。溝は幅33～45㎝、深さ５～10㎝で、東と北側は明瞭に溝と看取できるが、北西角から西側にかけては、やや不明瞭である。ただ、崖東端から175㎝ばかり西にあたる地点が浅い凹地を呈するので、この付近が西を画する線と推定した。

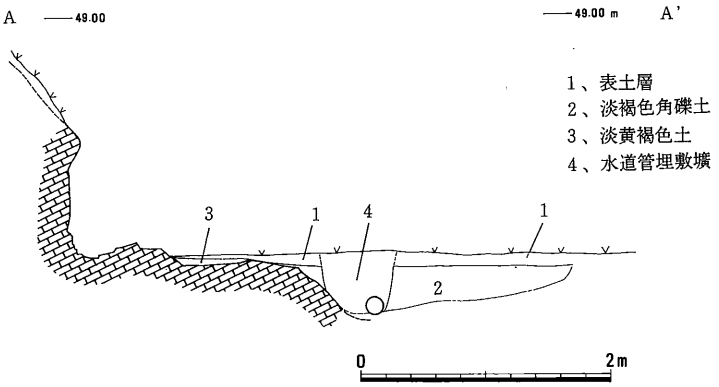
そこで、大胆に石室を推定すれば石室幅約130㎝ばかりの横穴式石室を復元できる。

以上は当該地に古墳を想定しての考え方であるが、反面そうした考えに疑問点も残る。その第１は、１ｍばかり垂直に切られている崖面に奥壁を構築するとすれば掘り方があまりにも狭すぎる。第２に通常の後期古墳の構築では、斜面高位部は大きく掘開するか、溝状の周溝を掘っているか、なんらかの地形の変貌が見られるが、ここでは硬い岩盤地形であるためかそうした掘り方痕跡は検出されない、などの点である。

しかし、ここでは陶棺の改葬地点と岩盤に掘り込まれた浅い溝を重要視して、当該地を古墳推定地としておきたい。



15. 古墳推定地平面図



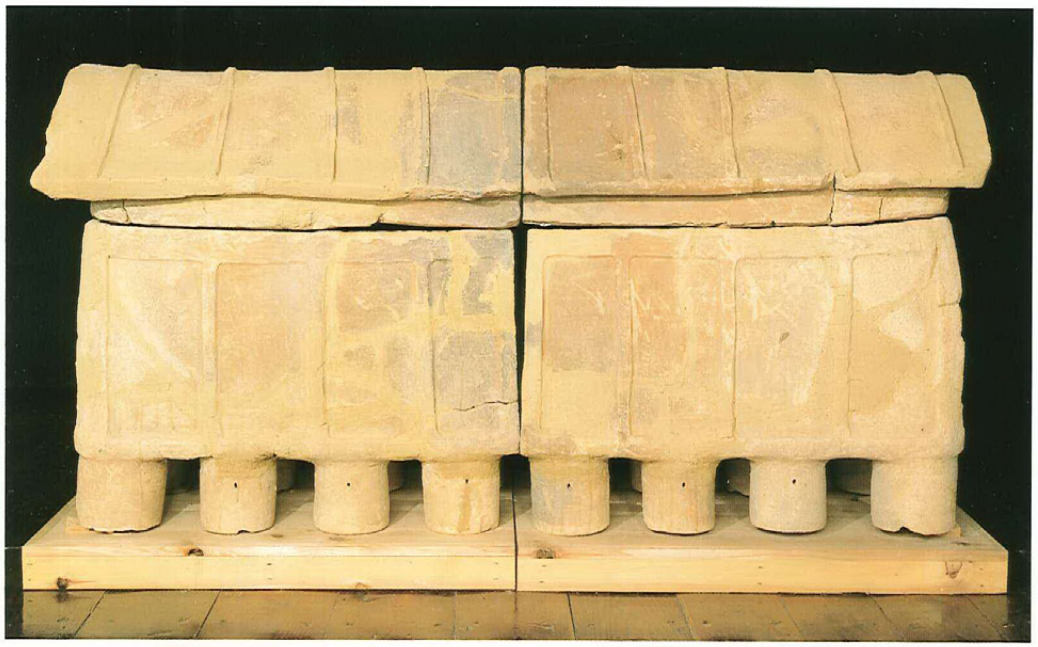
16. 古墳推定地断面図

5．陶棺

土師質家形切妻式陶棺である。調査時の観察では欠損が多く、復元は困難かと思われたが、意外に残存率がよく、若干の補強を加えて蓋、身と合わせ復元することができた。

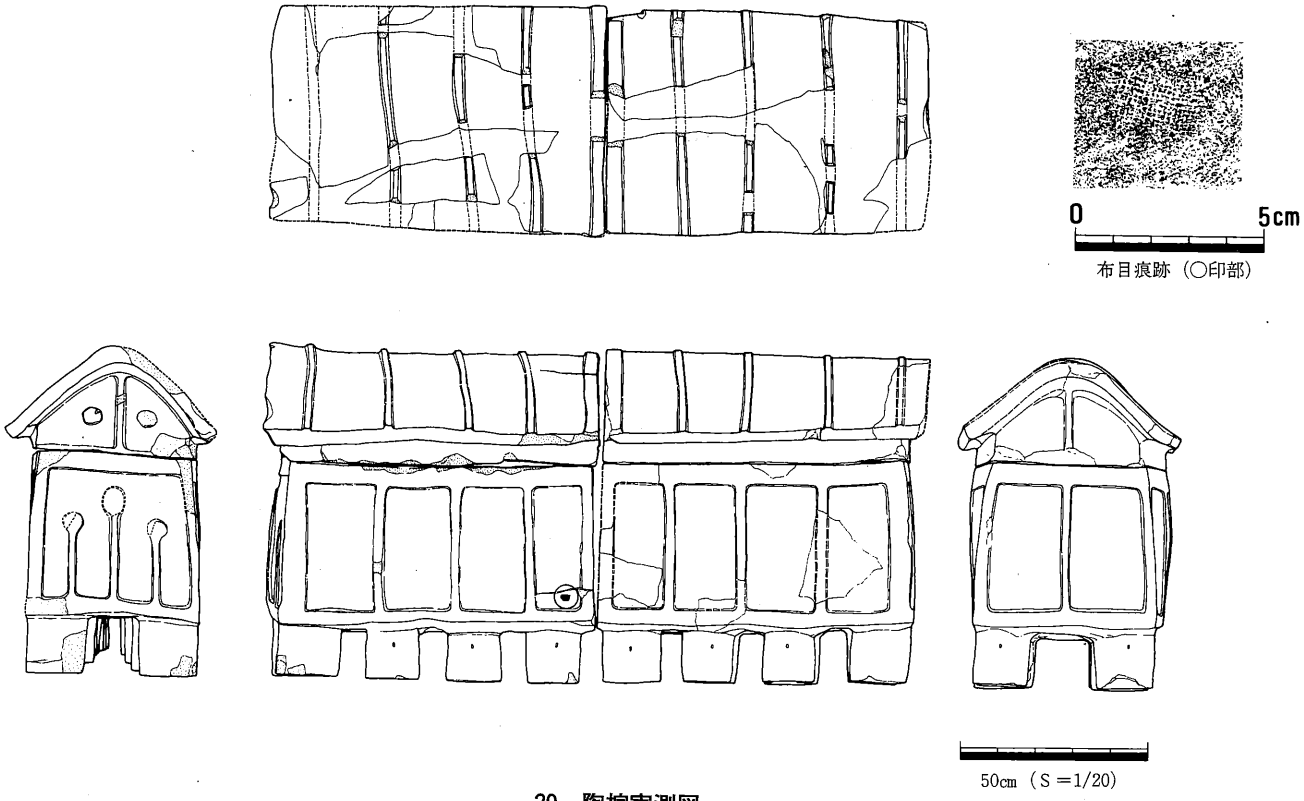
陶棺の規模は身部全長172cm、棺全高88～90cm、身部最大幅52cm、蓋部最大幅62cmである。脚は２列８行で径14～16cm、高さ13～14cmである。

身は、長方形の箱形で中央部を切断して二分割としている。底部の長さ172cm、上部で



17. 陶棺

18. 陶棺



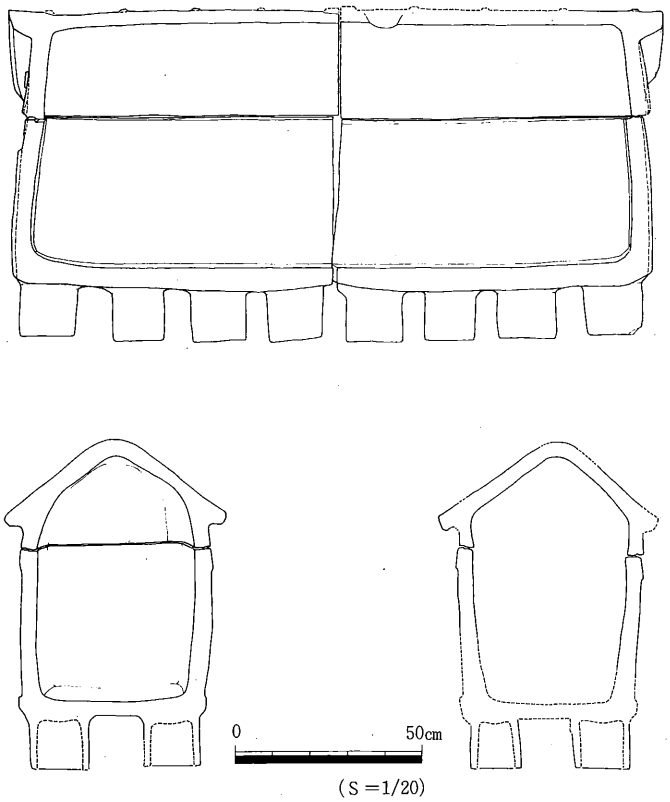
20. 陶棺実測図

の長さ166cmで、小口側は両側ともやや内傾している。

蓋は切妻式の屋根形で、妻部ならびに平部とも軒を出し、棟は丸い山形をなす、身と同様にその中央部を切断して二分割としている。身と接する部分の長さ168cm、棟下端の部分での長さ163cmである。身と同様に小口側は内傾する。棟はおおむね水平であるが、飾りのある小口側では軒先がやや外方に反っている。蓋の全長275cm、幅58～62cm、高さ28～30cmである。

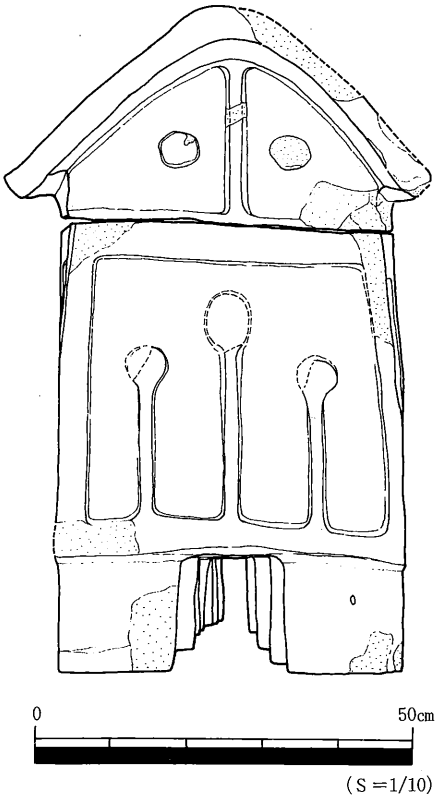
蓋、身とも合わせ部に段をつくって、接合部が密着できるようにしている。身の内面の調整は、上縁は板状工具による横刷毛目仕上げで、一部に幅3.7cmのカキ目状痕跡を残している。下半はナデ仕上げとなっている。蓋の内面は篦削りである。また、蓋内面中央部よりに最大径7cmの楕円状の封じ孔の痕跡がみられる。

陶棺の外表は身側辺は突帯によって縦長に半身を4区分し、飾りのない小口部は側辺の突帯よりもやや細い突帯によって二区分している。そして、全体としては身上縁部と小口側の突帯は他に比して幅広いものとしている。蓋部の突帯は、身の突帯の線状に接合部を除いて、細い突帯で飾っている。



19. 陶棺断面図

特殊な飾りを有する小口部の飾りは、身部には蓮のつぼみを想定させる↟状の浮文を縦に3列配している。3列の内中央のものが最も高く、陶棺の身下端の突帯から21cmまで上方に延びる。先端はすでに欠損しているが、ややふくらむ欠損痕跡からみて円形ないし楕円状（推定7.5cm×6.5cm）を呈していたものと推定される。図左（21図）の浮文は上幅1.4cm、下幅2.2cm、高さ1cm、長さ16.5cm

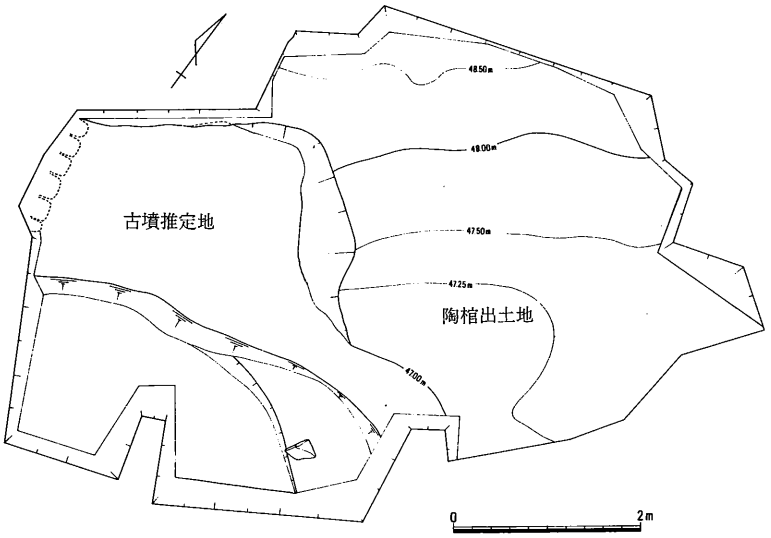


21. 装飾妻部実測図

の線状の突帯に径約５㎝の円形浮文がつく。円形浮文はおよそ1/2が欠損している。また、図右(21図)のものは左側のものとほぼ同形同大のものである。円形浮文は約1/3が欠損している。

蓋妻部は中央を突帯で区画した左右に１個づつの円盤状の浮文で飾っている。左側の浮文(21図)は完存していて５×４㎝で厚さ0.7～0.5㎝である。右側(21図)は円盤が剝離しているが、剝離痕跡は５×4.5㎝であり、左右ともほぼ同形の円盤状を呈していたものと推定できる。

陶棺の表面は身、蓋とも化粧土を塗って全体としては淡褐色を呈する色調となっている。この化粧土を塗って仕上げる段階で身の側辺部に刷毛目状の痕跡を残しているが、その側辺下部に布目痕跡（20図○印部）がみられるので、おそらく化粧土塗布にあたっては、この荒い目の布を使用したものと考えられる。



22. 調査後の地形図

6.まとめ

小枝２号墳と呼称する当該出土陶棺と古墳推定地は、工事中の不時発見のものであり、出土陶棺はともかく、古墳推定地については、なお不明なところがある。また、陶棺の時期についても共伴遺物が一切ないところから直接の手がかりはつかめない。陶棺の埋葬例が多い美作地方においても土師質家形陶棺を持つ古墳の本格的な調査例は少ない。家形陶棺の近時の調査例では久米町糘山釜田２号墳がある。(注１) この古墳からは土師質家形切妻式陶棺と須恵器が共伴している。陶棺は土師質とはいえ成形、調整技法は須恵質そのものであり、本例とは成形、形態を異にする。時期は７世紀後半と推定されている。美作町丹磨古墳は、破壊された小規模な横穴式石室に土師質陶棺の身部の1/2が残っていたが、棺身から推定すると家形陶棺であることは間違いないが、蓋部は切妻式か四注式か今の所不明である。しかし重要なことはこの陶棺の小口部に粘土紐のはりつけによる装飾と板状工具による同心円文を主体とした文様が描かれ、さらに石室内から宝珠つまみを有する須恵器杯蓋が共伴していることである。本須恵器の編年からみれば丹磨古墳の家形陶棺は７世紀中葉頃に埋葬したことがうかがえる。(注２)

以上の二例からして小枝２号墳出土の陶棺は７世紀中葉を前後する時期に埋葬したものと推定される。

陶棺の一方の小口を飾る粘土によるレリーフ状の装飾の解釈については、明解にはできないが、本例にもっとも近い文様構成をなすものに美作町平福古墳出土（今は野寺山古墳と改称している）の陶棺がある。現在、東京国立博物館所蔵となっているこの陶棺は、切妻式家形陶棺の一方の小口に円盤と粘土紐によるレリーフ状の装飾をほどこしているものである。本陶棺と共通する装飾は蓋部の妻に付した円盤と、身部の小口に付した↑状の浮文である。これら三古墳に共通する装飾付土師質家形陶棺は、現在の所吉井川とその支流である吉野川流域にみられる特徴を指摘することができる。この河川流域が美作地方における装飾付陶棺を内蔵する終末期古墳の所在する特徴的な地域となるかどうかは現時点では慎重を期さねばならないが、注目される地域として本古墳出土の陶棺は重要な位置をしめるものといえよう。

注１．村上幸雄「糘山遺跡Ⅱ」『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)』1980年
注２．河本清「所報吉備」６　岡山古代吉備文化財センター　1989年

4 624

小枝2号墳

1990年3月発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター　　河　本　　清

発行　吉井町教育委員会　　印刷　サンコー印刷株式会社